沖縄地理学会会報●第 55 号

2012 年 2 月 29 日発行

編集・発行 沖縄地理学会 ©　発行人 前門 晃
OKINAWA GEOGRAPHICAL SOCIETY (OGS)
事務局　〒903－0213 沖縄県中頭郡西原町字千原 1 番地
琉球大学法文学部地理学教室内 廣瀬 孝研究室気付
電話 098－895－8191
http://www.cc.u-ryukyu.ac.jp/~chiry211/
振込口座　02040－4－4697

第 1 回 石灰岩地域シンポジウム（報告）

石灰岩地域を知る最初の一歩

沖縄地理学会大会・総会を，上原冨二男氏のご尽力をいただいて，2011 年 7 月 30 日（土），沖縄大学の 2-301 教室で開催した。その大会において，午後 2～5 時，第 1 回石灰岩地域シンポジウムが開かれた。テーマは「石灰岩地域を知る最初の一歩」で，約 80 人の参加者があった。シンポジウムは，崎浜 靖氏（沖縄国際大）の総合司会で進められ，つぎのような内容であった（以下，敬称略）。なお，総会の報告は 16 ページ以降に掲載した。

以下に，発表者に執筆いただいた趣旨説明，基調講演，講演の要旨を掲載し報告とする。

●趣旨説明　前門 晃（オーガナイザー，琉球大）

●基調講演　上原 冨二男（沖縄大）：「石灰岩地域の自然と人」

●講演 1　名城 敏（沖縄国際大）：「石灰岩地域の土壌特性」／コメンテーター：廣瀬 孝（琉球大）

●講演 2　田代 豊（名桜大）：「石灰岩地域のジオツアーの実践」／コメンテーター：尾方 隆幸（琉球大）

●講演 3　我那覇 念（浦添高）：「石灰岩地域の世界遺産」／コメンテーター：上江洲 薫（沖縄国際大）

●パネルディスカッション　パネリスト：前門 晃（司会）・名城 敏・田代 豊・我那覇 念

▲左から，パネリストの前門・名城・田代・我那覇の各氏。右は意見を述べる石川友紀氏（編集子撮影）

●趣旨説明●

石灰岩地域の特徴を浮き彫りにする

前門 晃（琉球大）

本学会で，これまで地理教育シンポジウムを6回開いてきたが，地理教育以外にも連続シンポジウムのテーマになり得るものがないか，幹事会において話し合ったところ，「石灰岩地域」が浮かび上がってきた。

石灰岩の沖縄県土に占める割合は約 30 %で，全国平均（1 %未満）よりかなり大きい。石灰岩地域は，大半が台地で平たん地に恵まれているから，生活とのかかわりが深い地域である。その関係を思いつくまま列挙してみると，

（1）セメントの原料として使われている。

（2）アスファルトが広く使われる前は，道路の舗装材料として利用された。

（3）石灰岩の島はマラリアがない。

（4）沖縄戦では「ガマ」（石灰岩の洞穴）が避難壕となった。

（5）戦後は，普天間飛行場や嘉手納飛行場など石灰岩台地に軍事基地の多くが建設された。

このように，石灰岩は沖縄社会と切っても切れない密接な関係がある。ちなみに，グアムも石灰岩地域に基地が建設されている。石灰岩と地域社会との関係は，ミクロネシアなど太平洋島嶼地域でも重要なテーマである。

この連続シンポジウムを通して，さまざまな分野（地形・水文・土壌・農業・観光・集落など）から検討を重ね，「石灰岩地域」の特徴を浮き彫りにしていければいいな，と考えている。石灰岩地域が持つ「強み」を生かし，「弱み」を克服していくことが大事だろう。

沖縄社会は，これからも石灰岩と向き合って行かざるを得ない。「慶良間（の島々）は見えるが睫毛（まつげ）は見えない」ということわざがあるが，あまりにも身近過ぎる石灰岩をいま一度みんなで見詰め直していきたい。きょうのシンポジウムは，その石灰岩地域を知る最初の第一歩である。

●基調講演●

石灰岩地域の自然と人

上原 冨二男（沖縄大／上写真）

沖縄・奄美の島々には，本土に分布しない更新世の石灰岩が分布する。この石灰岩は琉球石灰岩と呼ばれ，サンゴ礁に由来することから，沖縄・奄美の石灰岩地域はサンゴ礁地域と重なっている。沖縄・奄美の石灰岩地域を構成する有人島は 36 を数え，うち 30 が沖縄県に属している。南西諸島の島々は目崎茂和氏（1978）によって高島と低島に分類され，その島タイプは地形・地質ばかりでなく，土壌や水文系とも対応していることが明らかになった。

沖縄島を中心に，石灰岩地域の主な地形として次のような地形があげられる。(1) 海岸段丘（宜野湾台地など），（2）傾動地塊（糸満市など），（3）カルスト地形（古期石灰岩地域では本部町山里周辺の円錐カルストが分布し，琉球石灰岩地域では，うるま市具志川から沖縄市・北谷町にいたる地域で北東から南西方向へ円錐カルストが分布している），(4) メサとビュート（知念半島一帯のメサは沖縄県最大のメサである。メサやビュートはグスクの立地とも関係している），（5）三角江＝エスチュアリー（石灰岩台地を貫流する河川に多くみられる。本部半島の大井川・満名川，中部の長浜川・比謝川・天願川・牧港川，南部の饒波川，報徳川，雄樋川など）。

石灰岩台地には古くから多くの集落が立地してきた。その要因の一つは豊富な地下水に涵養される泉の存在である。琉球国の首都・首里は地形的に地塁と考えられるが，その繁栄は豊富な泉によっていると言っても過言でないであろう。石灰岩地域の土壌である島尻マージも

泉とともに集落の生活を経済面から支えてきた。

その他，石灰岩と人との関係を考える際，資源としての石灰岩（マーイシ＝石材，イシグー＝道路舗装材，トラバーチン＝高級石材），沖縄戦（飛行場・ガマ・泉・イモ）は看過できない。（当日の配布資料より要約。文責編集子）

●講演 1●

石灰岩地域の土壌特性

名城 敏（沖縄国際大）

沖縄の地形は標高の低い低島的地形および標高の高い高島的地形に分類される。前者は，主に，第四紀の琉球石灰岩からなる低平な地形で，後者は，第三紀以前の古期岩類や火山岩類からなり，起伏の大きな山地を有する地形である。換言すれば，琉球石灰岩が分布している地域が低島的地形で非琉球石灰岩からなる地域が高島的地形である。

高島的地形は浸食地形で山地や大起伏丘陵となり，河川が発達し，酸性土壌である赤黄色土（国頭マージ）が分布している。低島的地形は溶食地形で石灰岩台地や小起伏丘陵となり河川が少なく，地下水の湧水が多く，中性から弱アルカリ性であるテラロッサ様土（島尻マージ）や弱アルカリ性である泥岩未熟土壌（ジャーガル）が分布している。

ジャーガルは，島尻層群の泥灰岩（クチャ）が風化して生成した土壌で，土色は土壌断面の全層にわたって灰色ないし青灰色である。

島尻マージは琉球石灰岩が風化して生成された土壌であるといわれており，土色は赤褐色ないし暗褐色である。なお，島尻マージについて，数多くの研究や報告がなされているが，それの母材や生成過程などについては，まだ，不明なことが多く，十分に明らかにされていない。考え方には，島尻マージは琉球石灰岩が風化してできた土壌であるとの考え方，中国大陸からの風成塵(黄砂)が風化してできたとの考え方，沖縄周辺の土砂が風化してできたとの考え方などがある。

日本の統一的土壌分類体系（第一次案）によれば，ジャーガルはグリムソル様土に，島尻マージは若い方からレンジナ様土，テラフスカ様土およびテラロッサ様土に分類される。

参考文献

名城 敏(1997)：「沖縄の土壌 ――ジャーガル・島尻マージ・国頭マージの特性」，沖縄国際大学公開講座委員会編『環境問題と地域社会――沖縄探訪』(沖縄国際大学公開講座シリーズ 2)，ボーダーインク，p. 61-106.

●講演 2●

石灰岩地域のジオツアーの実践

田代 豊（名桜大）

沖縄島の北西約 60 km に位置する渡名喜島は，随所に石灰岩を含む特徴的な露頭が観察され，地学巡検の場としても利用されている。このような地形や地質は，自然景観としても独特で傑出したものであるが，一般の人に広く知られていない自然景観・地形が開発によって改変・破壊されることは，これまで琉球列島の各地で見られてきた。最近の例では宮古島・狩又地区西海岸における「海中公園」建造工事に伴う海上の石灰岩堤の破壊などが挙げられる。このような地形や地質，景観の保護のためには，一般市民にその重要性や意義についての理解を広めることが必要である。

近年各地で，地学的な価値のある地域をジオパークとして認定し，その保全と適正な利用を図る取組みが進められている。その一環として行なわれるジオツアーは，市民に地学教育と自然景観体験の機会を与えるもので，新たな観光としての地域振興の側面を持つとともに，地域の自然保護のために有益と考えられる。しかしながら，琉球列島では未だ実践が進んでいない。そこで，ジオツアーに対する社会的な認知を広げるとともに，その定着に向けた可能性と課題を探ることを目的に，昨年（2010 年）7 月に名桜大学公開講座として渡名喜島でのジオツアーを試行した。

案内冊子やチラシの配布，新聞広告等により，

一般市民 30 名の参加が得られた。参加者に対するアンケートの結果によると，参加以前にジオツアーやジオパークについて知らなかった人は半数以上を占めていた。一方，アンケート回答者全員が今後ジオツアーに参加したいと回答し，ジオツアーが多くの人に魅力的なものであることが示された。さらに，仮に渡名喜島において半日程度のジオツアーを有償で催行することを想定し，それに対するガイド料金として支払える金額を尋ねたところ，平均額約 2,700 円の回答が出された。これは，渡名喜島におけるジオツアーを有償のツアーとして実施できる可能性を示唆するものである。

演者が参加している琉球列島ジオサイト研究会では，その後，本部半島および辺戸岬～辺戸御嶽のカルストにおいて各々ジオツアーを開催した。これらはいずれも多数の一般市民が参加し，好評を博することができた。沖縄の人々の間には，ジオツアーに対する需要が存在すると言え，とくに，地形・景観の変化に富み，その形成過程を追った解説ができる石灰岩地域は，ジオツアーの優れた対象地となると考えられる。

●講演 3●

石灰岩地域と世界遺産

我那覇 念（浦添高）

沖縄の世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群」は，首里城跡・園比屋武御嶽石門・玉陵・識名園・今帰仁城跡・座喜味城跡・勝連城跡・中城城跡・斎場御嶽の 9 遺産で構成される。

1　石灰岩と世界遺産との関係

1）石灰岩と世界遺産の立地

①石灰岩上に直接立地している世界遺産：今帰仁城跡（本部石灰岩），首里城跡・中城城跡・識名園・玉陵（琉球石灰岩）

②石灰岩及び泥岩・砂岩の地に立地している世界遺産：勝連城跡・斎場御嶽

③非石灰岩上に立地している世界遺産：座喜味城跡（名護層千枚岩），園比屋武御嶽石門（島尻層泥岩）

2）地形と世界遺産の立地との関係

①グスクの立地

世界遺産構成 5 つのグスクは，海上交易と防御の両面を考慮した場所を選択していると考えられる。その理由として，ア）眺望がきく高所にある――特に海への見通しがきくこと，イ）海岸から離れていてアプローチが簡単でない高所（中位段丘面上）に立地している。ウ）近くの海岸に発達するサンゴ礁に大きな切れ目がある――船の出入りがしやすく港を築くことが可能であること。エ）城壁のつくりが高くて強固である。

②グスクの構造

ア）琉球石灰岩の広がりがグスクの平面プランに影響を与えている（首里城跡・中城城跡）。イ）標高数十 m 以上の高所にある世界遺産構成グスクでは，地下水の地表面湧出箇所（湧泉）となる琉球石灰岩と泥岩の不整合面の露頭箇所をグスク内に囲い込むのが基本構造である（首里城跡・中城城跡・勝連城跡。今帰仁城跡・座喜味城跡はグスク外から確保）。また，グスク内における住居は，湧泉位置より高位置の水はけの良い場所に設けられた。

3）石灰岩とグスク以外の世界遺産

斎場御嶽では，石灰岩（奇岩）が植生とともに聖域としての雰囲気を醸し出している。玉陵では，琉球石灰岩を掘り込んで墓室に利用している。識名園では，池水の涵養域となっている（育徳泉，池岸）。

2　世界遺産の保存と活用に向けた地理教育の役割

石灰岩地域の学習時に，世界遺産との関連性で説明することで児童生徒の興味関心の高揚を促す可能性が考えられる。また，地域活性化と世界遺産の関わりを通して地域の産業について，世界遺産・緩衝地帯の保護を通して環境問題についてそれぞれ考えさせることもできるとのではと考える。

2011 年度大会 研究発表要旨

大会における研究発表（午前 10～12 時 20 分）は口頭発表 5 件ならびにポスター発表 2 件で，発表者に執筆していただいた要旨を以下に掲載する。

（口頭発表 5 件）

小規模離島における学校の役割と住民意識

水納島，慶留間島，大神島，鳩間島を比較して

堀本雅章（法政大沖縄文化研究所）

学校の第一の役割は教育の場であるが，特に山村や離島において学校は，地域の中心的な役割を果たすことが多い。本研究では，沖縄県内に位置する日帰り海水浴客の多い本部町水納島，成人の大半が学校教職員と役場職員が占める座間味村慶留間島，島民の 70 %が 70 歳以上の高齢者である宮古島市大神島，テレビドラマの影響で急速に観光地化した竹富町鳩間島における学校の役割等について比較した。これらの島を取り上げたのは，同一県内にあり，人口規模が類似するなど共通点が多いことによる。研究目的は，小規模離島における学校の必要性について 4 島における住民意識を比較し，さらに学校は子どもの教育以外に何があるのか，学校を存続させていくための方法について考察することである。

調査は，中学生以下を除く全住民を対象とし，2008 年 8 月から 2010 年 9 月の間に行った。有効回答者数は，水納島 37 人中 34 人，慶留間島 41 人中 32 人，大神島 30 人中 28 人，鳩間島 41 人中 31 人である。調査当時の幼小中学生数は，水納島 5 人，慶留間島 14 人，大神島なし，鳩間島 6 人である。

学校の必要性について「絶対必要」，「あった方がいい」，「学校の存続はそれほど問題ではない」のどれに該当するかについて質問を行った結果，大神島以外では「絶対必要」が大半を占めた。特に，島で生まれ育った子どもがいる水納島および慶留間島では学校の必要性が極めて高くなった。学校の役割について 4 島全体では「島の発展・活性化・明るくなる」，「地域のコミュニティー・交流の場・行事参加」，「大切なもの・場所」と続き，これらは「教育の場」を上回った。学校を存続させるための方法について，4 島全体では「子どもを増やす（出身者の親子・孫の呼び寄せ，若者の帰島，里子・海浜留学生の受け入れなど）」が最も多く，「就労場所・産業の整備」と続いた。ただし，調査当時既に休校中の大神島では，「学校存続は難しい」が最も多かった。

小規模離島において，学校は教育の場以外にも多くの役割があるが，出身者の帰島や移住者を受け入れる際，学校があれば子どものいる家族や，これから子どもをもつ人々を受け入れやすくなる。さらに，住民や出身者だけでなく，鳩間島では全国各地から海浜留学生としてやってくる様々な生活体験を持った子どもに，自然豊かでゆっくりと時間が流れる島での学校生活を送る機会を与えている。

恩納村喜瀬武原地区における キク類生産の地域特性

小川 護（沖縄国際大）

恩納村は沖縄本島のほぼ中央の西側に位置しており，南側を読谷村，北側を名護市と境を接している。電照ギク生産で知られる恩納村喜瀬武原区は，周囲を山々に囲まれた盆地を形成し，明治時代に士族等の入植によって開かれた歴史をもつ集落である。

現在では恩納村内における主要な農産地となっており，特にキク栽培は，沖縄県における先駆的役割を担ってきた集落である。

キク類産地化の背景としては，第一に，1974 年に喜瀬武原出身の宮城幸吉氏（元沖縄県花卉卸売市場長）によって，航空機による電照ギク本

土出荷が試みられ，本土市場から沖縄産露地電照ギクとして高い評価を受け，1976 年には沖縄県花卉園芸組合（現在の沖縄県花卉園芸協同組合＝太陽の花）が組織され，「太陽の花」としてブランド化に成功したことが挙げられる。

第二には，1970 年から土地改良事業を積極的に推進し，約 50 ha の面的整備が 1990 年迄に完了し，畑作農業の基盤形成が成立したこと。

第三においては，1990～1998 年において，灌漑排水事業が完了したこと。

第四には，喜瀬武原区の世帯数に占める農家数は，村平均の 2 倍以上である 24 %となっており，農家の年齢構成も 40～50 代が中心となっており，当面，他地区のような後継者不足等の心配ないことなども考えられる。

近年，菊の単価が低落傾向にあり，（キク農家は）以前は 2 千坪で生活できていたのが，現在は，3 千坪でないと生活できないとの声もある。今後は，キクと他の作物を組み合わせた周年出荷体制の確立を図り，安定的な農業収入を確保する必要がある。

サンゴ礁の漁撈について

だれが／いつ／どこで／何を／どのように，獲るか

渡久地 健（琉球大・非）

本発表に用いた奄美大島大和村や本部町備瀬のサンゴ礁漁撈にかかわるデータは，ここ数年間の調査から得られたが，その大半は公表した。同じデータを用いて，副題の観点からサンゴ礁漁撈の特徴について素描を試みた。

漁をする人々が，漁獲を上げることができる背景には，漁場という環境と，そこに生息する生物についての実践的な知識の体系がある。では，サンゴ礁漁場は，何によって構成されているのか。

まず（a）地形があげられるが，それは漁場の骨格をなし，短期間にはほとんど変化しない。つぎに，（b）底質があり，岩盤・砂・礫・サンゴ・海藻などに分類できる。そして，漁場は（c）海水に満たされている。海水は，潮位の変動があり，潮流も生じる。さらに，漁場には漁獲の対象たる（d）生物は，潮の動きに伴って移動する。

漁場は時間とともに潮位の変化などがあり，絶えず変動し，その変化に伴って漁獲対象の生物が漁場に出入りし，漁場としての価値が移り変る。漁場は天候の影響も受ける。漁場が最も高い価値に達した時が「漁期」であり漁を行なう「時間帯」である。本部町備瀬で盛んに行なわれている網漁の一つ「イユーマキ」から明らかなように，狙う魚を獲るためには，最適な時間と場所を決定しなければならない。漁獲の多寡は，その知識の運用の仕方と技に大きく左右されると考えられる。

サンゴ礁で漁を営む主体は，専業漁民だけではなく，非専業漁民の老若男女が含まれる。大和村の事例から，漁の主体（「だれ」）によって，漁場と捕獲される生物（「何を」）に大きな差異が認められる。サンゴ礁漁撈では，寺嶋秀明氏（1975）が指摘しているように，「何のために」（自家用／販売目的）捕獲されるかという視点も重要である。

沖縄でなされるべき防災教育

尾方隆幸（琉球大）

東日本大震災の教訓を踏まえ，沖縄でなされるべき防災教育について注意喚起するとともに，防災教育にジオツアーを活用する意義と問題点を指摘した。東日本大震災では，国をはじめとする関係機関，および一般市民の間で，地球科学的知識が決定的に不足していることが露呈した。この責任は，もちろん関係機関や一般市民にもある。しかし，われわれ地球科学者が積極的にアウトリーチ活動やサイエンスコミュニケーションを行ってこなかったことにも大きな責任がある。

こうした反省を踏まえ，全国の地球科学関係の学会で，アウトリーチ活動，特に防災教育へ

の見直しが行われている。沖縄地理学会のような地方学会も，このような動きに追随する必要がある。むしろ，地域に根ざした地方学会こそ，きめの細かい活動を通して，地域的な自然災害の解明とその防災・減災に向けた取り組みを続けていくべきであろう。

自然災害の本質をとらえるためには，地球の営みを理解することが第一である。その点で，いま注目されているジオツアーが活用できる。沖縄の場合，津波石などはジオツアーを活用した防災教育の格好の教材である。しかしこのような地形学的遺産を取り上げる際には，堆積物の遡上高や年代値などのサイト固有の解説にとどまるのではなく，「地形は変化する」という地球の営みを丸ごと理解させる視点がより効果的である。今後，沖縄でも，防災教育の要素を取り入れたジオツアーが盛んに実施されるようになることを期待したい。

サンゴ礁海浜における暴浪波の遡上限界高度

沖縄島の計測結果

青木 久（大東文化大）

暴浪時の遡上波到達高度とサンゴ礁水平幅（リーフ幅）との関係を定量的に明らかにすることを目的とし，沖縄島のサンゴ礁海浜の中から，リーフ幅が大きく異なる 16 海浜を選定し，海浜植物が分布する海側端を指標として，遡上波到達高度を推定した。その結果，リーフ幅が大きい海浜ほど，遡上波到達高度が低くなることがわかった。とくに，リーフ幅が 500 m までの範囲で遡上波到達高度の減少が大きい。

（ポスター発表 2 件）

近代西表島におけるマラリア有病地

歴史 GIS による空間表現

崎浜 靖（沖縄国際大）・鈴木厚志（立正大）

1．研究のねらい

20 世紀前半の先島諸島において，年間 1000 人から 2000 人に及ぶマラリア患者が報告されている。そもそも，マラリア媒介蚊であるコガタハマダラカは，水たまりや水田が形成されやすい「湿地」を好み，こうした地理的環境を有する地域が有病地となった。本研究では，20 世紀前半の先島諸島におけるマラリア有病地の地理的環境を，高精度 DEM と旧版地形図や史料を組み合わせて復元し，土地利用や集落形態との関係から考察を行った。

2．研究方法

本研究では，まず先島諸島の地形別の島分類を行い，表層地質と土地利用との関係，各島嶼の地形別面積を比較した。続いて，20 世紀前半の西表島におけるマラリア罹患状況を整理し，1922（大正 11）年の集落別マラリア患者数を算出して地図化した。地形表現には 10 m 間隔の DEM を使用し，これにより西表島の地理的環境を復元した。さらに集落単位のマラリア有病地の事例としては，西表島東部に位置する南風見集落と仲間集落を選定した。これら集落の 5 万分の 1 地形図（1921 年）から土地利用状況を明らかにし，それらの幾可補正により高精度 DEM 上に表示し，その一部は水系図とともに 3 次元視覚化を試みた。

3．まとめ

本研究の分析結果は以下の通りである。

①19 世紀後半の西表島では，字別にみて 15 の集落が確認できるが，そのいずれもが有病地であった。全体的にみると海岸部に面した場所で，その多くは，石灰岩が表層を覆う，より乾燥した土地に集落が形成されている傾向が確認される。田や畑は，水系網が複雑に入り組んだ砂州で囲まれた干潟やマングローブ林の生い茂る湿地に近接する傾向があり，荒れ地も比較的多く分布していた。

②西表島ではマラリアの蔓延により，20 世紀前半において廃村が相次いだ。廃村時の住民の移動先は，マラリア無病地であった鳩間島・新城島・竹富島などの周辺離島が含まれており，無病地が島内に存在する石垣島の例とは大きく異なっている。

③マラリア罹患率（1894 年）の高い仲間集落

(77.8 %) と南風見集落 (56.7 %) は，それぞれ 1903 年と 1926 年に廃村となるが，移動先である新城島 (上地・下地) などの無病地からの遠距離通耕によって農業 (稲作) が継続された。

沖縄島北部の小流域における水と土砂の流出特性

廣瀬 孝 (琉球大)

亜熱帯島嶼沖縄における河川の水文環境を把握することは，沖縄の水資源問題や赤土流出問題を考える上で重要である。本報告では，これまで行ってきた，沖縄島北部の小流域における水文観測で得られた結果とこれまで得られた知見を報告した。調査対象流域は，森林流域として，与那川支流域，裸地を含む人工改変流域として，大保大川支流の 2 流域である。これらの流域で，水や土砂に関する水文観測を行った結果，これまでに次のような知見が得られている。1) 降雨量に占める水流出の割合 (流出率) は，定常時を含めた比較的長期の値では約 50 % (森林流域)，約 35 % (裸地を含む流域) であり，降雨イベント時では低く (10～30 %) なる。2) 降雨イベント時に，流量と電気伝導度は降雨に対して速やかに応答している．また，裸地を含んだ流域における流出成分分離の結果からは，降雨流出時における流出成分は直接流出成分が主体であり，降雨の内の一定量は速やかに流出していることが伺える。しかし，降雨イベントにおける流出率が高くないことから，沖縄島北部の厚い土層への降雨の浸透と，基盤など，より深部へ浸透した水が平常時に流出していることが示唆される。3) 水収支から推定される流域の蒸発散の割合は，約 50 %である。4) 与那川の森林流域においては，掃流土砂の流出には，期間中のピーク流量が大きく関係していた。一方，裸地を含んだ流域では，掃流土砂量は，強い (3 mm/10 min 以上) 降雨回数とピーク流量に大きく依存していた。このことから，裸地を含んだ流域では，土層表層への雨滴による侵食が掃流土砂流出量に影響しており，与那川の森林流域では流域全体が植生で覆われているため，降雨時に斜面土層表層から直接流出する土砂は少ないものと思われ，土砂の主な供給源は，河道内であることが示唆される。5) 沖縄島北部の山地流域においては，土砂は溶存物質や浮流物質として流出する割合が高い。

会誌『沖縄地理』12 号の原稿募集

『沖縄地理』第 12 号を今年度末に(2012 年 6 月)に発行する予定です。会員の皆様には，ふるって投稿していただくようご案内いたします。

「会誌『沖縄地理』投稿規定」(『沖縄地理』11 号，99 ページ)ならびに「沖縄地理原稿執筆要領」(同，100～102 ページ)をご一読の上，「送付状」を添えて原稿のハードコピー3 部を事務局まで提出して下さい。

送付状は，事務局にご連絡いただければ，ワードのファイルをお送りします。また，送付状は学会ホームページからもダウンロードできます。なお，投稿をご検討の方は，前もってご連絡いただけますと，その後の作業の都合上助かります。

● 提出期限：2012 年 3 月 31 日 (土)

● 事務局：〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原1番地　琉球大学法文学部地理学教室内　沖縄地理学会事務局(廣瀬 孝)
メール：thiro@LL.u-ryukyu.ac.jp
電話：098－895－8191

第 7 回 地理教育公開シンポジウム（報告）

第 7 回地理教育シンポジウムが沖縄県教育委員会の後援をいただいて，2010 年 9 月 10 日（土），午後 2〜6 時，沖縄国際大学 3 号館 118 教室で開催されました。今回 7 回目を迎えるこのシンポジウムは，沖縄県における地理教育の普及と向上をめざし，沖縄地理学会が 2006 年から毎年継続して開催しています。

松井秀郎氏（立正大学地球環境科学部地理学科／右写真）による基調講演と稲嶺 保（沖縄県嘉手納町立屋良小学校教諭），小泉邦彦（兵庫県西宮市立上甲子園中学校教諭），仲田邦彦（沖縄県立南風原高校教諭）の三氏による実践報告（以下に要旨を掲載），および討論が実施され参加者（約 70 人）による活発な意見交換と交流が行われました（以下，敬称略）（西岡尚也＝記）。

●基調講演要旨●

小・中・高の新学習指導要領における地図・地球儀の指導について地理教育の進む方向

松井秀郎（立正大）

平成 18 年の約 60 年ぶりという歴史的な教育基本法の改正を受けて，新学習指導要領は先行実施を別として，小学校では平成 23 年度から既に全面実施され，中学校では平成 24 年度から全面実施，高等学校では平成 25 年から年次進行で実施の予定である。

PISA2006 年調査での「読解力」（自らの目標を達成し，自らの知識と可能性を発達させ，効果的に社会に参加するために，書かれたテキストを理解し，利用し，熟考する能力）の得点が OECD 平均程度まで低下したことを受けて，第 3 期の中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において，この「読解力」の育成に関して学習指導要領の見直しが検討された。この課題解決のためには，国語だけではなく，各教科，総合的な学習の時間など学校の教育活動全体で身に付けていくべきものであり，教科等の枠を超えた共通理解と取組の推進が重要であるとされた。

PISA 調査における読むテキストの内容として，「非連続型テキスト」があり，これにはデータを視覚的に表現した図や地図・グラフなどが含まれている。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会の「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」答申（平成 20 年 1 月）においても，小学校社会では，「地図帳や地球儀の活用を一層重視する」ことや「また，47 都道府県の名称と位置，世界の主な大陸や海洋，主な国の名称と位置などを調べる学習を新たに加え，自分たちの住む県（都，道，府）の位置，世界の中での我が国の位置及び領土をとらえることができるようにする。」ことが挙げられている。また，中学校社会地理的分野では，「図の読図や作図などの地理的技能を身に付けさせることを一層重視するとともに，身近な地域の調査の学習において，諸課題を解決し地域の発展に貢献しようとする態度を養うことができるようにする。」とされている。

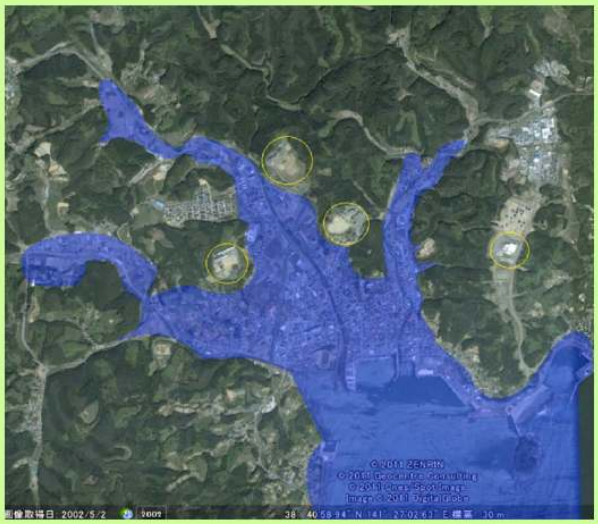
更に，高等学校地理歴史科では，「我が国及

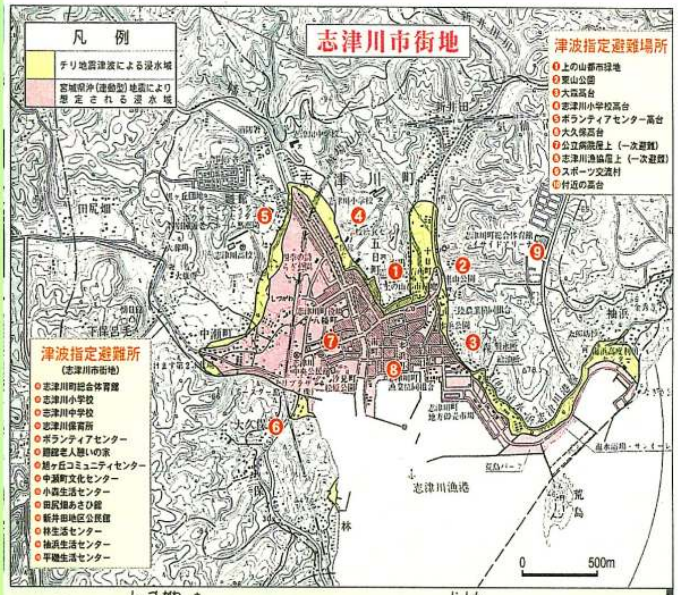
び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を一層深めさせるよう科目間の関連を重視するとともに，各科目で専門的な知識，概念や技能を習得，定着させ，それらを活用できるよう改善を図る。その際，地図を活用した学習を一層重視する。」としている。

また，地理 A・地理 B 共に，「地図を活用した学習の一層の重視」が強調され，「地図の読図や作図などの作業的，体験的な学習活動は，今次改訂で強く求められている思考力・判断力・表現力等の育成を図る観点からも重要」としている。なかでも，地理 A では，生活圏における防災教育の充実にも重点が置かれ，「身の回りにある地図を取り上げた学習や防災に関する学習など日常生活と密接に結び付いた内容を充実」することとなった。

具体的には，新学習指導要領の大項目(2)「生活圏の諸課題の地理的考察」の中項目イで「自然環境と防災」を内容として学ぶこととなっている。図 1(右) は，現行の地理 A 教科書に掲載されている津波に関するハザードマップの例である。そして，図左は 2011 年 3 月 11 日の東日本大地震による津波被災地の範囲を示している。ハザードマップによる防災学習の重要性は言うまでもないが，ハザードマップの限界についての認識もこれからの学習として大切となろう。

つぎに，異文化を理解し尊重することの重要性については，新学習指導要領の大項目(1)「現代世界の特色と諸課題の地理的考察」の中項目イで「世界の生活・文化の多様性」を内容として学ぶこととなっている。図 2（次ページ）のように，日本の各地でモスクの設置もされている。国内でのムスリムの話題も種々ニュースになることも多く，世界各地の生活・文化を民族性と結び付けての理解を進めることが必要となろう。





▲⑤宮城県志津川町の津波避難地図　チリ南部沖地震(1960年)のときに受けた津波の被害状況とともに，再来が予想されている宮城県沖地震が発生した場合に予測される浸水地域が示されている。ハザードマップの一種である。

＊2005年10月より南三陸町

図 1　地理 A 教科書に載ったハザードマップと実際の津波災害地

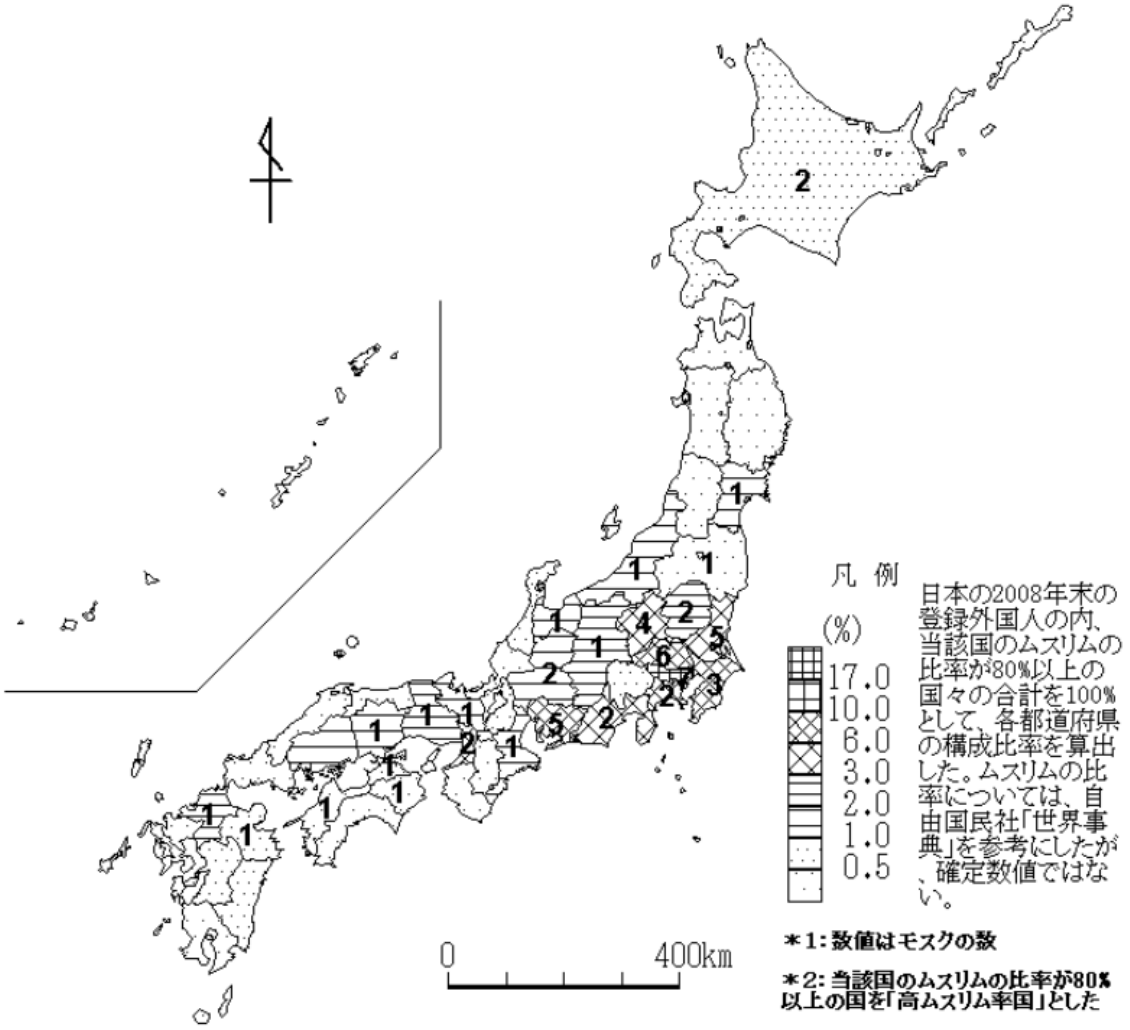


図 2　都道府県別高ムスリム率国の登録外国人構成比率とモスクの数（2008 年）
資料 1（独）統計センター「登録外国人統計 2008 年」
資料 2　早稲田大学人間科学学術院「日本のモスク 2」

新学習指導要領では，地理歴史科の各教科間の関連性を重視している。世界史が必修科目となり，日本史と地理が選択科目となった履修形態が平成元年告示・平成 6 年実施の学習指導要領から続き，近年の教科書需要数（生徒や教員などの使用する教科書数）の推移は図 3（次ページ）のように変動してきている。各教科の教科書需要数のバランスが変化してきていることは，その年代ごとの生徒の社会科学習の内容が変動してきていることを意味している。社会科としての総合的な学習が達成されるように，教育現場での努力もさらに求められることになると考えているところである。

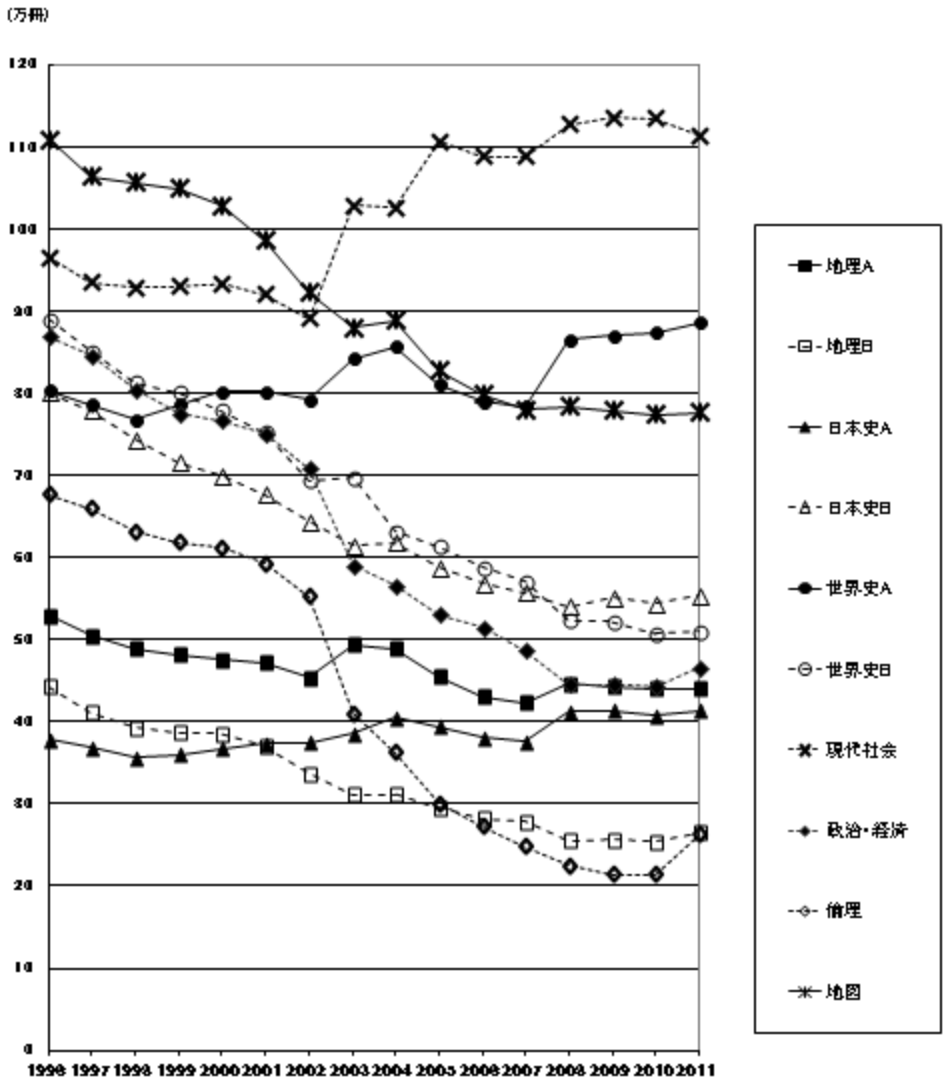


図 3　従前と現行の学習指導要領における地理歴史科・公民科の教科書需要数の推移（1996-2011）

＊2003 年～2005 年の間は新旧移行期（学年進行）

（文部科学省資料により松井秀郎作成）

●授業実践報告 1●

等高線の授業の工夫
「地理が好き」が社会科好きの入り口に

稲嶺 保（屋良小）

1.　社会科好き＝社会科の授業が好き：小学校高学年に進むにつれ，社会科の好き嫌いがはっきりしてくる。「嫌い」と考える児童の多くは「覚えるのが大変」「たくさん書く（写す）のが面倒」と考えているようだ。2. 地図帳の活用：「地理は社会科の土台である」ということを押さえて，日常からから地図帳指導に力を入れている報告があった。

今回の発表では「地図（等高線）」を用いた授業を，①授業時間の楽しさ，②日々の授業の楽しさ，の 2 つの視点から，「自ら考えること」「授業に参加すること」で「楽しい」と感じる児童が増える。日々の授業に「楽しいパーツ」（都

道府県フラッシュカード，地名探し，教室八方位など）を組み入れる工夫（学年を問わず）が紹介された。（文責：西岡尚也）

●授業実践報告 2●

中学校社会科教育における地理教育の発展学習の可能性
地図を利用した班での市内巡検

小泉邦彦（上甲子園中）

中学校における地理教育の現状紹介では，小学校時代の地図帳使用が不足していて，中学校での地理学習が「深化」しにくいという報告があった。

「2 次元から 3 次元へ」という視点が生徒の関心を高める。甲子園球場が「なぜ水はけが良いのか」「なぜドーム球場にならないのか」などは，旧地形図（西宮市教育委員会作成の副教材）を見れば「旧河道（天井川）」に位置していることがわかる。この例からも従来の地理＝「空間的な認識」に「歴史的な認識」を工夫し組み入れることで，生徒の興味関心が深まり，おもしろい授業が可能である。（文責：西岡尚也）

●授業実践報告 3●

身近な地域の教材化

仲田邦彦（南風原高）

学校周辺の身近な地域の教材化の工夫が報告された。1.「ジャーガル」＝「ジーシル（ウチナーことば）」＝粘土質土壌 ＝カボチャ栽培。2. 首里崎山町「豚の像」＝かつて泡盛の工場から出る「酒粕」を餌として養豚が発展。3. 与那原町に「瓦工場」の多い理由。など，仲田先生の著書『沖縄県の地理』の内容を紹介しながら「身近な地域の教材化」の例の工夫が楽しく報告された。（文責：西岡尚也）

討論会

基調報告の松井先生および授業実践の 3 人の先生方と，会場参加者の質疑応答形式で「楽しい地理授業」「さらなる工夫」などについて，活発な意見交換・交流が行われた。参加者の多くが今回の「成果」を学校現場に持ち帰り，さらに「楽しい地理授業」が沖縄県内で行われるように期待したい。（文責：西岡尚也）

▲上左から，パネリストの仲田・小泉・稲嶺・西岡（司会）の各氏。右下は質問をする崎浜　靖氏（編集子撮影）

一枚の図で語る地理トピック　#02

沖縄島のサンゴ礁海岸に襲来する暴浪波は，どこまではい上がるのか

サンゴ礁の岸沖幅と遡上波到達高度との関係に関する一考察

青木 久（大東文化大）

台風などの暴風時に発生する暴浪波が，内陸のどこまで遡上してくるのかを把握することは，安全に人間生活を営むうえできわめて重要である。琉球列島にみられる裾礁型のサンゴ礁地形は，暴浪波に対する消波堤や潜堤の役割をもつと古くから定性的に論じられてきたが，その役割を定量的に明らかにした研究はほとんどないと思われる。そこで裾礁型サンゴ礁が発達する沖縄島のいくつかの海浜を対象として，サンゴ礁地形の岸沖方向の水平幅（以後，単にリーフ幅とよぶ）が異なる海浜上で，暴浪時の遡上波が到達する平均海面からの鉛直高度（以後，遡上波到達高度とよぶ）がリーフ幅によってどのように異なるのかを定量的に明らかにするため，野外調査を行ってみた。

暴浪作用中の遡上波到達位置の直接観測には非常に大きな危険や困難を伴うため，計測に関して以下のような工夫をした。海浜上部にはコウライシバやグンバイヒルガオなどの海浜植物の群落が繁茂していることが多い。これら海浜植物の繁茂する条件は，長期間，遡上波（海水）の侵入や遡上波による砂礫の移動がほとんどないことである。コウライシバやグンバイヒルガオが分布する海浜植物の海側端を，遡上波の到達上限の位置とみなし，静穏時波浪が作用する期間に野外計測を行った。

リーフ幅が 75〜2250 m と異なる 16 海浜（東海岸で 7 地点，西海岸で 9 地点）を調査対象地点として選定し，上述の方法で遡上波の到達高度を計測した。計測は干潮時に実施し，測定時の海面において，レーザー距離計を用いて計測したのち，潮位表を用いて平均海面からの高さに補正した。海浜前面に島や岩礁，暗礁などが存在する場所や防波堤や突堤などの人工構造物のある場所では，波の遡上が抑制されるので，これらの障害物から離れた地点でデータを収集した。

図 1（次ページ）は得られた結果について，横軸にリーフ幅（W）を，縦軸に遡上波到達高度（Rmax）の値をとり，東海岸と西海岸のデータを分けてプロットしたグラフである。Rmax は最大値が 5.4 m，最小値は 2.2 m と海浜によって大きく異なり，全体的に W が大きくなるにつれて，Rmax が小さくなる傾向が認められる。このことはリーフ幅が大きい海浜ほど，遡上波到達高度が低くなることを示している。とくにリーフ幅が 75 m から 500 m 程度まで広くなるにつれて，遡上波到達高度の減少が大きいことがわかる。このようにリーフ幅が異なると，遡上波到達高度に差異がみられることは，リーフに入射した沖波の波高減衰の程度が，リーフ幅に規定されることを示唆するものであるといえる。データのばらつきや東海岸の Rmax が西海岸よりも高くなる傾向については，海浜に襲来する暴浪波の規模，海浜の透水性などの堆積物特性などが影響を与えていることが推測されるが，今後の課題としたい。

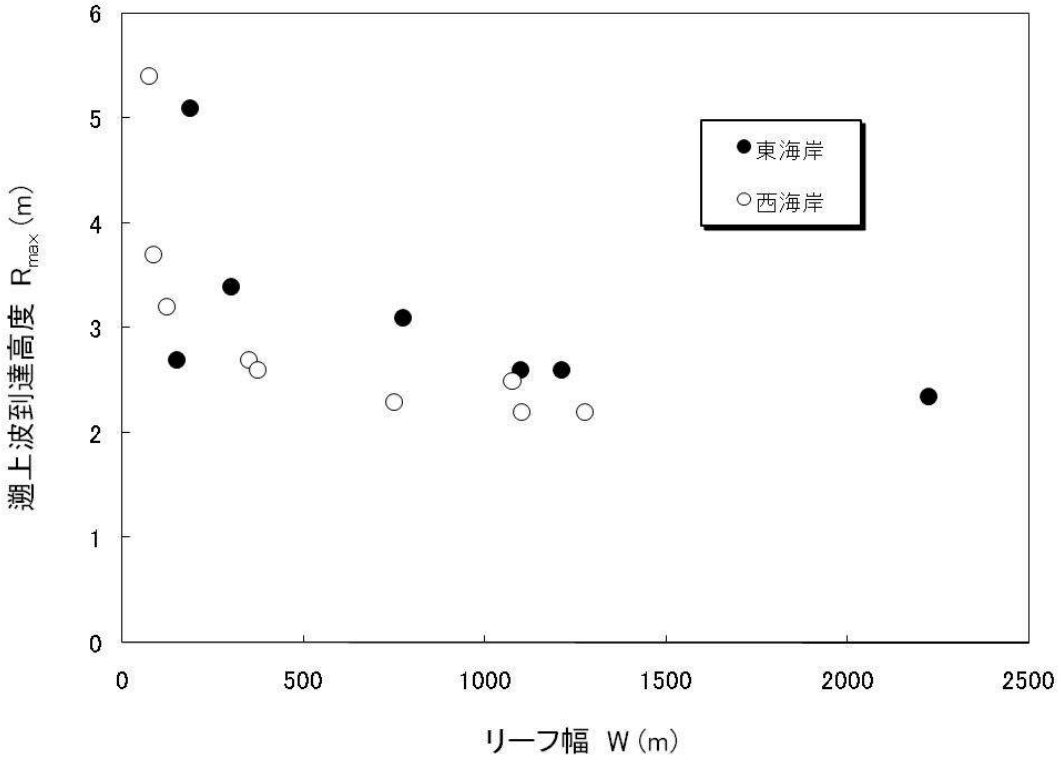


図 1　遡上波到達高度とリーフ幅との関係

2011 年度例会（報告）

2011 年度の沖縄地理学会例会が，2011 年 9 月 26 日（月）午後 6 時 30 分から，琉球大学法文学部研究棟 211 地理学実験室にて開催されました。発表者は，高屋康彦氏（東京大学 空間情報科学研究センター客員研究員）で，「岩石の風化に及ぼす地質と環境条件の影響」というテーマで発表されました。発表の内容は，高屋氏のこれまで行ってきた研究が中心で，地形学という立場から岩石の風化の問題を非常にミクロなところまでとらえ，かつ環境条件の違いを念頭に置いたアプローチは，非常に興味深く，参加者は少なかったものの，活発な議論がなされました。（文責：廣瀬 孝）

例会における質疑討論風景
右は講師の高屋氏，右は廣瀬氏
（編集子撮影）

●●総会報告●●

2011 年 7 月 30 日（土），沖縄大学の 2-301 教室で開催された 2011 年度沖縄地理学会総会は，会員多数参加の下，崎浜 靖会員の司会で開催され，渡邊康志会員を議長に選出した。前会長の河名俊男氏が本会名誉会員に推薦され全会一致で承認された。ここにその推薦理由書を掲載し，また承認された 2010 年度事業報告と 2011 年度事業計画，並びに 2010 年度決算，2011 年度予算を以下に掲載して総会の報告としたい。

● 名誉会員候補者 河名俊男会員について

河名俊男会員は，長年にわたり，琉球大学教育学部で自然地理学，特に地形学・第四紀学を基礎に，琉球列島の海面変動・地殻変動・サンゴ礁，津波石の調査，津波襲来時期と津波の遡上高，台風の高波による岩塊移動など，琉球列島の自然や災害に関する総合的な研究と教育に従事してきた。この間，多くの著書，論文，報告書を執筆し，優れた業績を挙げるとともに，多くの人材育成に貢献した。2009 年 3 月に琉球大学を定年により退職されている。

河名俊男会員の研究業績は，琉球列島を中心とするノッチ，海面変動，地殻変動，およびサンゴ礁の発達史に関する研究，琉球列島における過去数千年間の津波襲来時期と津波の遡上高に関する研究，琉球列島における近年および歴史書に記載されている台風の高波による岩塊の移動に関する研究など，島嶼である琉球列島の自然や災害の特徴を明らかにしてきている。こうした自然災害に関する研究で得られた知見は，沖縄県の国土利用計画審議会の災害部門の委員をされるなど，地域にも還元されている。最近では過去の津波跡や歴史書に記載された自然災害の記録を基に，考古学分野との共同での研究も行われている。

沖縄地理学会では，会員歴 29 年，その間，幹事，評議員，会長 6 年の役職を歴任した。会誌「沖縄地理」は，8 号より閲読制をとり，毎年発行されるようになっているが，これは当時会長であった河名俊男会員の功績が大きい。幹事会の定例化も実施され現在に引き継がれている。さらに，2009 年 10 月には，日本地理学会秋季大会の琉球大学での開催を，沖縄地理学会との共催という形で会長の立場から大会実行委員長をされ，大会を成功に導いた。沖縄地理学会は来年で 30 周年を迎えることになるが，これも河名俊男会員のこれまでの沖縄地理学会への尽力が大きい。

以上の功績により，河名俊男会員を本会の名誉会員候補者として推薦する。

● 2010 年度事業報告

1. 大会・総会
   2010 年 7 月 24 日（土）：沖縄国際大学 5-107 教室および 5 号館 1 階ロビー（参加者 50 人）
2. 懇親会
   2010 年 7 月 24 日（土）：パブロ（参加者 30 人）
3. 第 6 回地理教育公開シンポジウム（後援 ： 沖縄県教育委員会）
   2010 年 7 月 24 日（土）
   テーマ：「教養としての地理教育のあり方を考える」
   基調講演：映画で学ぶ地理教育――『シネマ世界めぐり』の出版をめぐって
   講師：矢野司郎（京都明徳高）
   実践報告：儀間奏子（名護市立大北小）・金城 均（読谷中）・西岡尚也（琉球大）
   パネルディスカッション：「教養としての地理教育――何をどう伝えるのか」
   全体司会：西岡尚也（琉球大），コメンテーター：崎浜靖（沖縄国際大）
4. 県内巡検
   2011 年 3 月 20 日（日）午後 1 時～午後 5 時（参加者 11 人）
   案内者：濱里正史（沖縄ライフプラン総合研究所）・上原冨二男（沖縄大）・上江洲 薫（沖縄国際大）
   テーマ：「県都那覇の今と昔を歩く」
   巡検コース（概要）：那覇バスターミナル（旧海岸線について観察）→ 国際通りとその周辺にて（国際通り周辺の今昔について観察），ガーブ川（雨水排水路）と水上店舗について観察（2009 年 8 月の鉄砲水による事故現場も含む）→ 牧志のいわゆる「不良住宅地区」（ガーブ川沿い）→ ジュンク堂書店裏で解散
5. 例会
   (1) 2010 年 8 月 12 日（木），沖縄国際大学沖縄経済環境研講演会との共催，沖縄国際大学 5-107 教室，16 時 20 分～17 時 50 分（参加者 27 名）
   テーマ：「アジアの都市発展と水環境変化」

講師:谷口智雅(立正大・非)

(2) 2010 年 8 月 18 日(水), 琉球大学法文学部研究棟 211 地理学実験室, 18 時 30 分～20 時(参加者 8 人)

テーマ:「カンボジアアンコールワット遺跡を構成する砂岩ブロック風化プロセスと風化速度」

講師:藁谷哲也(日本大)

講師:柚洞一央(札幌学院大・非)

(3)11 月 19 日(月), 沖縄国際大学 13 号館 1 階会議室 16 時 20 分～18 時, 沖縄国際大学南島文化研究所シマ研究会との共催(参加者 26 人)

テーマ: 「宮古・八重山諸島における過去 1000 年間の歴史津波と伝説の津波――1771 年明和津波, 1667 年の地震と津波, 下地島のヨナタマ伝説, 多良間島のブナゼー伝説を中心に」

講師:河名俊男(前沖縄地理学会会長)

(4) 2010 年 12 月 27 日(月), 琉球大学法文学部研究棟 211 地理学実験室, 18 時 30 分～20 時(参加者 11 名)

テーマ:「養蜂業における自然資源利用――移動性と間接性のなかで」

(5)2011 年 3 月 5 日(土), 沖縄国際大学 5-107 教室, 16 時 30 分～17 時 40 分, 南島地名研究センターとの共催(参加者 50 人)

講師:目崎茂和(南山大)

テーマ:「沖縄・琉球・日本・倭の神話風水地理――「古事記の法則」からみた沖縄風水地理」

(6) 2011 年 6 月 10 日(金)琉球大学法文学部研究棟 211 地理学実験室, 18 時 30 分～20 時(参加者 10 人)

講師:堀本雅章(法政大学沖縄文化研究所)

テーマ:「慶留間島における架橋に対する島民意識」

6.『沖縄地理』第 11 号の発行(2011 年 6 月 30 日)

7.「沖縄地理学会会報」第 53 号(2011 年 1 月 31 日)・第 54 号(2011 年 6 月 16 日)の発行

8. 沖縄地理学会ロゴマーク募集について

● **2011 年度事業計画**

1. 大会・総会

2011 年 7 月 30 日(土)沖縄大学 2-306 教室

2. 懇親会 17 時 30 分

3. 第 1 回石灰岩地域シンポジウム

テーマ:「石灰岩地域を知る最初の一歩」

オーガナイザー:前門 晃(琉球大), 総合司会:崎浜靖(沖縄国際大)

基調講演:上原 冨二男(沖縄大)「石灰岩地域の自然と人」

講演 1:名城 敏(沖縄国際大)「石灰岩地域の土壌特性」/コメンテーター:廣瀬 孝(琉球大)

講演 2:田代 豊(名桜大)「石灰岩地域のジオツアーの実践」/コメンテーター:尾方隆幸(琉球大)

講演 3:我那覇 念(浦添高)「石灰岩地域と世界遺産」/コメンテーター:上江洲 薫(沖縄国際大)

パネリスト:前門(司会)・名城・我那覇・田代

4. 第 7 回地理教育公開シンポジウム(後援:沖縄県教育委員会)

2011 年 9 月 10 日(土)沖縄国際大学 7-201 教室

テーマ:これからの地理教育が進む方向

基調講演:松井秀郎(立正大, 前文科省教科書主任調査官《地理》)「小・中・高学習指導要領における地球儀の指導について――地理教育はどんな方向に進むのか」

パネリスト:松井秀郎(立正大)・西岡尚也(琉球大)・稲嶺 保(屋良小)・小泉邦彦(上甲子園中)・仲田邦彦(南風原高)

5. 巡検

2012 年 3 月 3 日(土)本部半島(ジオツアー)

案内者:田代 豊(名桜大)・尾方隆幸(琉球大)

6. 例会

2011 年 9 月 26 日(月):高屋康彦(東京大学 空間情報科学研究センター客員研究員)18 時 30 分～

テーマ:岩石の風化に及ぼす地質と環境条件の影響(仮題)

7.『沖縄地理』第 12 号の発行

8.「沖縄地理学会会報」第 55 号・第 56 号の発行

9. 沖縄地理学会ロゴマーク募集について

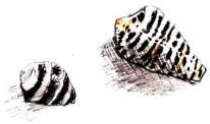
10. 評議員会

2011 年 7 月 22 日(金)琉球大学法文学部研究棟 211 地理学実験室で開催

11. 幹事会

2011 年 7 月 6 日(水)以下 2 ヶ月に 1 度の割合で, 琉球大学法文学部研究棟 209 教室で開催

(文責:小川 護)



「地理オリンピック」が浦添高校で開催されました

地理オリンピック（正式名称：科学オリンピック地理日本選手権）が，2012 年 1 月 21 日に，県立浦添高校で開催されました。高校 2 年生 3 人がエントリーしました。これは国際地理オリンピック日本委員会が主催（文科省ほか後援）していて，2012 年 8 月に行われるメキシコ大会への日本代表の選抜も兼ねています。将来沖縄県から日本代表が選出されることを期待して，沖縄地理学会も協力していきます。（詳細情報は「地理オリンピック」で検索）（文責：西岡尚也）

ロゴマーク公募結果（中間報告）

沖縄地理学会では，2012 年に学会創設 30 周年を迎えるのを記念し，ロゴマークを公募していました（10 月 31 日締め切り）。7 人の方から述べ 11 点の作品応募がありました。今後は編集委員会の審査を経て，2012 年 7 月の大会で入賞作品を発表する予定です。

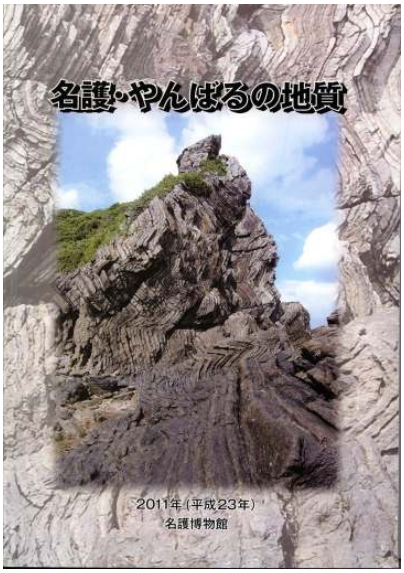
●会員が関わった本●●●○

事務局が把握している，会員が関わった本を紹介します（敬称略）。会員が関わった本や地域誌など（共著・編著・執筆分担等）の情報提供をお願いいたします。

●遅沢壮一・渡邊康志［編著］**『名護・やんばるの地質』**，名護市博物館，2011 年 3 月 31 日発行，A4 判，210 頁，頒価 2500 円。フルカラー。

＊会員の**渡邊さん**の共編著。平成 20 年度に策定された「新名護博物館（仮称）基本構想」において，新博物館の基本テーマは「名護・やんばるのくらしと自然」となっている。本書は，多様な生命を育み人々の生活を支えてきた自然，その自然の骨格というべき地質と地形について長年の踏査によって著わされた研究成果，詳細極まりない「やんばる地質誌」である。図・写真多数。地質図付き。

（次号に書評を掲載予定。）



●崎浜 靖・安里和雄・新里浩一・上原 正［監修］，安里盛昭［写真撮影］：**『訪ねてみよう粟国島のあんなところこんなところ』**，2011 年 3 月，粟国村役場発行，A5 判，96 頁，非売品。

＊会員の**崎浜さん**が監修に参加。粟国島にある3地区（字）の自然景観と集落景観を中心とする写真と地図が網羅されている。洞窟・池・井戸・屋敷・拝所・御嶽などの景観写真とその説明が記載されている。特に巻末に袋綴じにされている地図には，本に掲載されている写真と符合できるようになっており，その裏には粟国島の暦（季節区分・行事・植物・動物の生育＝見られる時期），伝統行事の由来など写真をふんだんに使った体裁となっている。今年バージョンアップする予定だという。

●書●評●

小林 茂著『外邦図――帝国日本のアジア地図』（中公新書）

2011 年 7 月 25 日／中央公論社発行／新書判／282 頁／860 円＋税／ISBN978-4-12-102119-9

地図は地理学研究において必携の用具である。本書は特に日本国外において日本の国家機関が作製した地図について詳述した特異な地形図の歴史書である。外邦図とは，本書「はしがき」の冒頭で，明治期から第二次世界大戦終結まで，日本がアジア太平洋地域について作成した地図を「外邦図」と呼ぶと規定している。アジア太平洋地域とは「大東亜共栄圏」構想の範域と対応するといえる。明治維新から日本が近代化していくなかで，一般図としての地形図作成は国家的要請として，陸軍参謀本部陸地測量部がその任務を担当した。ここでいう外邦図はアジア太平洋地域における植民地統治とそれに伴うさらなる勢力拡大のための侵略戦争遂行に必須の手段となった。いみじくも著書は，外邦図が「戦争と植民地統治の道具」であったと明言してはばからない。

本書は初めに近代国家の地図作成の歴史から解説を進める。そのなかで測量の技術的発達について述べ，具体的に植民地における測量実施から地図作成の事例を展開していく。植民地の土地調査事業のなかで，沖縄県，台湾，朝鮮，関東州について測量の技術的視点から説明している。特に沖縄県の場合，旧慣温存期間があり，地割制度による農地を個人所有に転換すべく土地整理事業が明治 32 年から明治 36 年にわたり明治政府により実施された。王府時代の農地は小字単位でまとめられ，農地の範囲は間切単位の原名（印部名）のネットワークでまとめられていた。地割制度から全国統一の農地制度に統一すべく測量がかなり高度な技術手続きにより実施されたことが述べられている。

明治時代から近代国家形成において地形図作成が重要な縁の下の力となったことがうかがえて興味深い。多くの地理学徒のみでなく一般のひとびとに読まれることを期待してやまない書である。

参考文献

『昭和・大正琉球諸島地形図集』解題，植書房，1999.
島袋伸三「沖縄の地形図」『南島の地名』第 3 集，1988，78～90 頁

（島袋伸三・琉球大名誉教授）

活動日誌

▼2011/07/06(水) 2011 年度第 1 回幹事会(沖縄大学 2-201 室, 午後 6 時 30 分～) 議題:①2011 年度大会の準備状況(石灰岩シンポジウム, 名誉会員の推薦)／②『沖縄地理』11 号の発行／③会報 54 号の発行／④ロゴマークの募集／⑤例会報告と今後の地理教育シンポジウム・例会等について

▼2011/07/13(水) 2011 年度第 2 回幹事会(琉球大学法文学部研究棟 209 室, 午後 6 時 30 分～) 議題:①2011 年度大会の準備状況(石灰岩シンポジウム, ポスター, 名誉会員の推薦など)／②『沖縄地理』11 号の発行／③ロゴマークの募集／④今後の地理教育シンポジウム・例会等について

▼2011/07/22(金) 第 31 回沖縄地理学会評議員会(琉球大学法文学部研究棟 211 地理学実験室, 18:30～) 議題:①2010 年度活動状況報告／②2010 年度決算／③会員の入会・退会／④2011 年度総会・大会(2011 年度事業計画, 2011 年度予算, 大会発表申込, 大会プログラム発送)

▼2011/07/30(土) 沖縄地理学会大会・総会(沖縄大学 2-301 教室, 午前 10～午後 5 時) (→1～8 ページ, 16～18 ページ)

▼2010/09/10(土) 第 7 回地理教育シンポジウム(沖縄国際大学 3 号館 118 号室, 午後 2～6 時) (→9～13 ページ)

▼2011/10/26(水) 2011 年度第 3 回幹事会 (琉球大学法文学部研究棟 209 室, 午後 6 時 30 分～) 議題:①2011 年度大会の報告／②地理教育シンポジウムの報告／③ロゴマークの募集／④『沖縄地理』12 号について／⑤会報 55 号について／⑥今後の例会・巡検等について

▼2011/12/21(水) 2011 年度第 4 回幹事会 (沖縄国際大学 5 号館 6 階経済学会議室, 午後 6 時～) 議題:①『沖縄地理』12 号について／②会報 55 号について／③ロゴマークについて／④2012 年度の大会シンポジウムについて／⑤30 周年事業について／⑥今後の例会・巡検等について

▼2012/02/29(水) 「沖縄地理学会会報」(55 号)発行

会員消息

会員の入退会

編集後記 沖縄の亜熱帯常緑広葉樹林(照葉樹林)は, 新緑の季節を迎えました。とりわけタブノキやイタジイ(オキナワジイ;本土のスダジイと同種)は一番の見ごろです。▼さて, 本号の発行が大幅に遅れましたことを深くお詫びいたします。編集の仕事で一番大事なことは原稿の催促だと考えていますが, そのタイミングや締め切時期の設定がたいへん難しいことを今回ほど痛感させられたことはありませんでした。▼早々と玉稿をご執筆いただきました**青木 久**さん, **松井秀郎**氏に深謝申し上げます。青木さんの研究は近く一つの論文に仕上げられるものと楽しみにしています。そして, 松井氏のご講演(要旨)は「会員皆で共有したい」(**前門 晃**会長)得難い内容です。▼お陰さまで第 1 回石灰岩地域シンポジウムを無事スタートすることができました。石灰岩地域における土地利用(畑作・天水田), 土地の民俗分類, 集落景観論, 水文地形学, 円錐カルスト, 石灰岩植生, 石灰岩地域を描いた絵画・小説, 石灰岩地名など, 多様なテーマが考えられます。余技でも, 小さな研究余滴(落穂拾い的なも)でも構いません, お気軽に事務局までご提案(プロポーザル)をいただければ幸いです。▼今号は20ページになりました。紙数の関係上, 予定していましたリレー・コラム“FIELD NOTES”は休ませてもらいました。次号にご期待ください。また, 会員の**渡邊康志**さんの共編著『名護・やんばるの地質』の書評(新刊紹介)も準備していましたが, これも次号に掲載する予定でいます。(と)